

食育推進の取り組み事例

事例 1

鮫川村バイオマスヴィレッジ構想（鮫川村バイオマスタウン構想）

1. 地域の現状

経済的特色

現在の鮫川村は、「まめな暮らしが育む環境を生かしたやすらぎとふれあいの村づくり」を基本理念とする第3次鮫川村振興計画に基づいて「まめで達者な村づくり」「ゆうきの里づくり」を進めている。そのコンセプトは鮫川村そのものを地域ブランドに、自立する「元気な村づくり」である。この構想を推進するために、「ほっとはうすさめがわ」や館山公園、手まめ館など交流拠点施設の整備や活用をはじめ、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムを推進し、交流人口拡大と新たな産業おこしによる地域の活性化を図っている。農家の方々が幻の米「農林21号」で作った日本酒「鮫川21」は大変に味わい深く、村を訪れる方々の評判となっている。



住民は素朴で心やさしく、しかも困難に耐えて互いに助け合い、農林業を主産業として勤労の美風を養いつつ、魅力あるふるさとづくりに励んできた。

平成17年には、地域づくり総務大臣表彰を受賞するなど村内外から注目を集めている。

特産品：大豆加工食品、えごま油、じゅうねん(エゴマ)タレ、エゴマドレッシング、エゴマふりかけ、しいたけ、木炭(124トン)

村の花・木・鳥：やまゆり\しらかば\きじ（里づくりのシンボル：オオムラサキ）

景勝地：江竜田の滝、鹿角平観光牧場、天狗橋、強滝



(江竜田の滝)



(鹿角平観光牧場)



(特産品の一例)

農業は、かつては、葉たばこ、養蚕、こんにゃくの産地であったが、現在は水稲と高冷地の寒暖の差が激しい気象条件を活かしたトマト、さやいんげん等のそ菜や畜産を組み合わせた複合型農業経営が中心である。水稲を抜いて現在農業産出額第一位の畜産は、繁殖経営を中心として収益性の高い農業経営が行われている。現在(平成 19 年 11 月)村内で肉用牛約 2,100 頭、乳牛約 330 頭、養豚約 17,350 頭が飼育されており、そこで生産される堆肥の高品質化や利活用が課題となっている。

森林面積は、当村 13,130ha の総面積の約 76%(10,000ha)を占め、県内有数の森林地帯となっている。木炭の生産はかつて県内最大の生産を誇っており、年間 120 トンに上る。

【耕地面積】 単位：ha

区分	全体
耕地面積	1,460
田	702
畑	754
普通畑	440
樹園地	2
牧草地	312

耕作利用率・・・82.2%
 作付面積
 田 646ha
 うち転作面積 270ha
 畑 555ha
 うち普通畑 241ha
 うち牧草 312ha
 うち果樹園 2ha

出典：農林統計データ、わが町村の姿(平成 18 年度)

【林地】 単位：ha

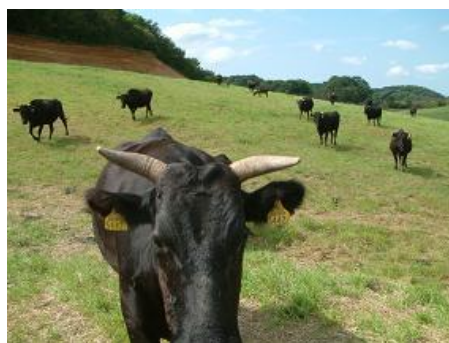
区分	全体
林地	10,000
国有林	3,536
民有林	6,245
公有林	219

林野率等
 林野率・・・76.2%
 人工林率・・・66.4%
 保安林率・・・1.2%
 国有林野率・・・35.4%

出典：農林統計データ、わが町村の姿(平成 18 年度)

【家畜飼養頭数】 単位：頭、戸

区分	頭数	農家数
肉用牛	2,100	200
乳用牛	330	10
豚	17,350	3
めん羊	12	3



平成 19 年 11 月 16 日現在(当村調) 養豚農家数に企業を 1 件含む。

社会的特色

鮫川村は、明治 22 年に旧 7 ヶ村が合併して誕生した。本村は、福島県の南端、阿武隈高原の頂上部に位置し、縄文・弥生時代から歴史と伝統に生まれ、時代の変遷とともに幾多の困難を乗り越えながら着実に発展してきた。

社会経済情勢のめまぐるしい変化の中、平成 15 年 7 月には、近隣 2 町との合併の是非を問う住民投票が行われ、村民の 7 割が合併反対の意思を示された。この意思を尊重して自立する村をつくるため、「豆で達者な村づくり」を中心に様々な事業を進めている。

また、「まめな暮らしがはぐくむ環境を生かしたやすらぎとふれいあいの村づくり」を基本理念とする第三次鮫川村振興計画を進めていくため、村民の英知と創意を結集し、農業の振興や福祉対策、子育て支援体制づくりなどを実現していくこととしている。



壇ノ岡遺跡出土品

地理的特色

鮫川村は、福島県の南端、東白川郡の北東部に位置し、東は古殿町といわき市、西は棚倉町と浅川町、南は塙町と茨城県北茨城市、北は石川町に接している。

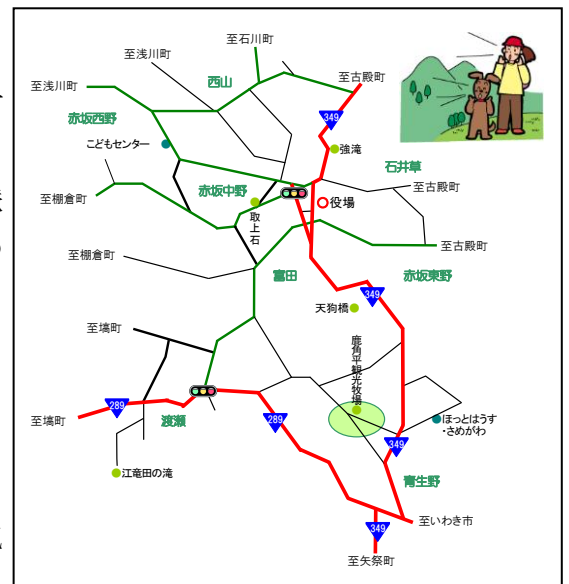
本村は、阿武隈高原南部の頂上部にあたるため、山脈丘陵が重なり、村の大部分は標高 400m～650m の範囲にある。耕地は山間に開け、丘陵部の緩傾斜の多くは、採草放牧地に利用されている。

寒暖の差が激しく、四季の推移が明確である。気候は、概ね表日本型で年平均気温は 10℃、年間降水量は 1,200～1,500mm 位である。

農作物は 5 月頃の晩霜、夏季の異常低温、早冷など気象災害を受けやすく、特に水稻は周期的に冷害がある。

台風等による被害は少ないが強風による農作物への被害、集中豪雨による道路や農地の局部的な決壊、水田への浸水などがある。冬季の気温は氷点下 15℃ 位まで下がり、土壌の凍結層が深い。積雪量は比較的少なく、根雪は局部的で、その期間は比較的短い、希に降雪が 40～70cm を超えることがあり、造林地に倒木などの大きな被害を受けることがある。

鮫川村には豊かな自然があるため、四季の移り変わりにより美しい景観を形成することができ、村民はじめ来訪者の心を和ませている。また、3 つの川（阿武隈川、鮫川、久慈川）の源流部に位置し、生活排水や重金属に汚染されていないきれいな水がある。



行政上の地域指定

特定農山村地域、山村振興地域、農業振興地域、過疎地域自立促進特別措置法(新過疎法)指定地域

6. バイオマスタウン形成上の基本的な構想

構想の理念

碧い空、豊かな緑、美しい山なみが招くさわやかな高原の村、鮫川。白樺が自生し、山すその清流にヤマメが遊泳する恵まれた自然環境、山峡に発する源流は白いしぶきをあげ、鮫川(鮫川水系)となり、渡瀬川(久慈川水系)となり、また殿川(阿武隈川水系)になって太平洋に注ぐ。この3つの大きな水系の源流部に位置する鮫川村は、源流の役目として美しい自然環境を守り続けてきた。毎年、村民総参加によるゴミ拾い、草刈などのクリーンアップ作戦を実施している。今後も資源循環型農業の確立に向け、刈草や森の落葉などの未利用バイオマスを効果的に活用し、地元有用土着菌を活用した土づくりセンターの整備を進め、さらには耕畜連携により、休耕田での飼料作物の栽培を積極的におこない、本村の農業振興を図ることを目指している。

また、どぶろく特区の申請も視野に入れ、東京農業大学との連携を図り、栽培容易なキクイモからのエタノールや焼酎の開発など、村の未利用資源を最大限に活用する仕組みを構築し、生きがいの創造につながる新たな産業を目指したい。

昭和63年3月には、先人の遺したこの貴重な資産を受け継ぎ、更に村民意識を高揚し、自覚と誇りをもって、これからの世代にたくましく伸びて行く鮫川村をつくるため、村民憲章を制定した。それには、「1. 自然に親しみ、環境を整え、美しく住みよい村をつくりましょう。2. 教養を高め、伝統を重んじ、文化の香り高い村をつくりましょう。3. 健康で働き、きまりを守り、心のふれあう福祉の村をつくりましょう。4. 資源を活かし、創意と努力を重ね、豊かな村をつくりましょう。5. 協同と連携の意識を深め、希望と活力にみちた村をつくりましょう。」との内容を定め、村づくりの礎となっている。

先人が遺したこの意志を受け継ぎ今回のバイオマスヴィレッジ構想(バイオマスタウン構想)では、**次世代の子ども達に美しく魅力ある村として遺してあげるため、基幹産業である農業の6次産業化を図り地域の活性化を図るとともに、地域に眠っている資源を有効に活用して、循環型社会を形成すること、そしてかけがえのない地球の自然環境を守りながら村の発展に寄与することが目的である。【100年後に輝き続ける村づくり】**



さめがわ子どもセンター



天狗橋



強 滝



遠ヶ竜農村公園

(1) 地域のバイオマス利活用方法

① 廃棄物系バイオマス、未利用バイオマスの有効活用「良質堆肥による土づくり」



(昔ながらの落ち葉の利用法)

鮫川村の基幹産業は農業。農業の基本は、生命が宿る生きた土づくり。その土づくりの核となる施設が「鮫川村豊かな土づくりセンター」である。

村に豊富に存在する家畜排せつ物を原料に落ち葉、稲ワラ、刈草、廃菌床、木酢液などの農業残さを配合して堆肥化を促進する。堆肥は、牛ふん（繁殖、肥育、酪農）と豚ふんそして副資材（落ち葉等）を混合させ、ホイールローダ

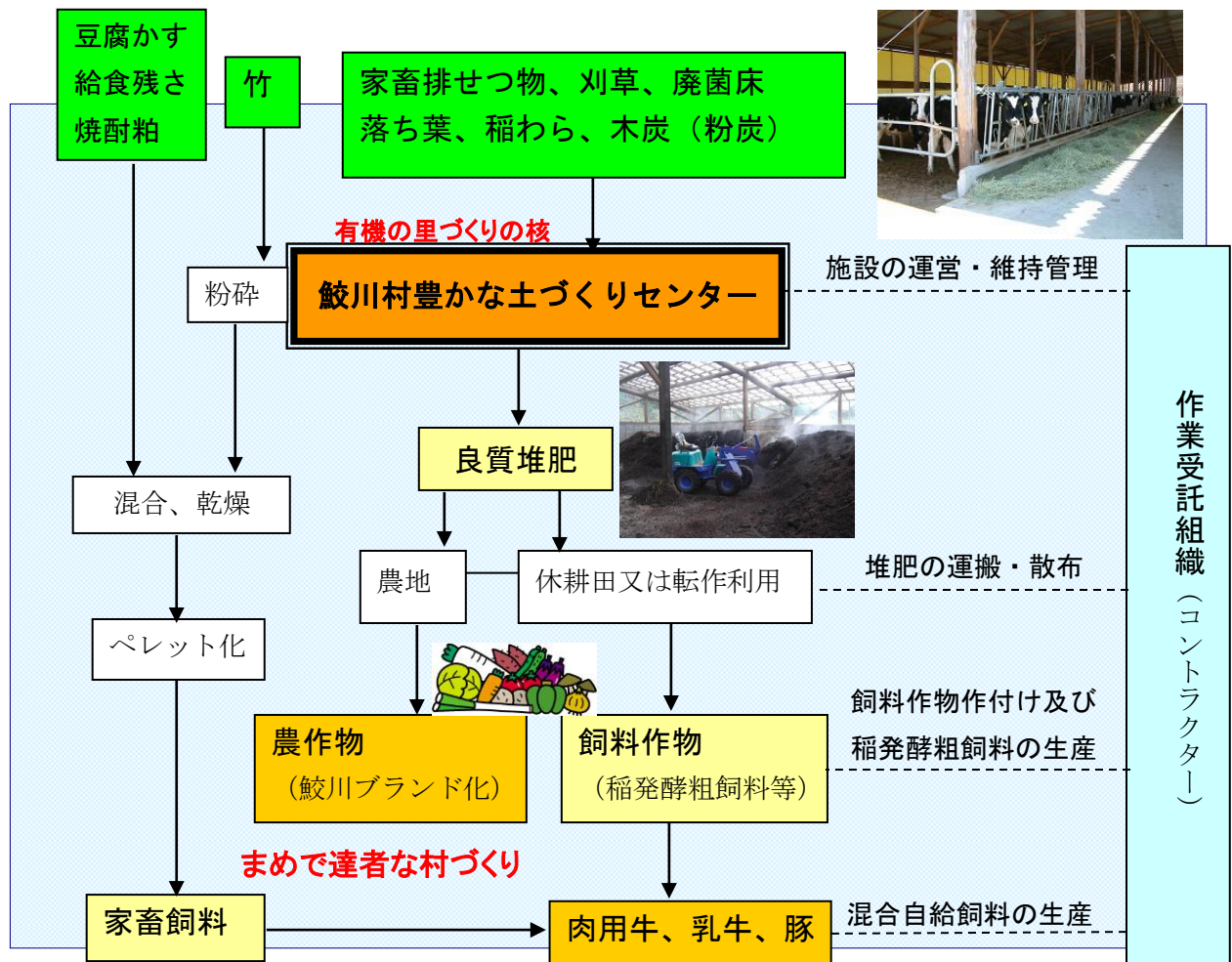
ーによる切り返しにて1次発酵・2次発酵をおこない熟成させ、堆肥化を図る。中でも落ち葉に付着する地元土着菌（枯草菌、放線菌、乳酸菌等）を有効に活用して、耕種農家からの要望に応えうる良質な堆肥を生産する。できた堆肥を農地に還元して健康な土づくりを目指す。

さらに、休耕田などを利用し、堆肥を活用して飼料作物（稲発酵粗飼料等）の栽培を行い、良質自給飼料生産の推進を行う。また、飼料生産に係わる作業の効率化、低コスト化や安定的かつ高品質な供給を図るため、飼料生産等を受託できる組織の育成・支援を行い、若者の雇用機会を拡大する。



(稲ホールクroppサイレージ)

このように耕種農家と畜産農家と作業受託組織（コントラクター）の連携により、村内に、有機的なネットワークを構築することで、安心・安全・健康な農作物を効率的に生産でき、村のブランド化を図る。また、村内に自生する竹を利用した飼料を生産する。



② 間伐材・林地残材等の木質バイオマス活用

1) 「ほっとはうす・さめがわ」における薪ボイラー導入

「ほっとはうす・さめがわ」においては、利用客が里山から得る自然の恵みを体験出来るよう多数の自然体験プログラムを実施しており、暖房機器に薪・ペレットストーブを使用している。しかし、風呂の給湯は灯油ボイラーで行われているため、薪ボイラーを導入することで更なる森林資源の活用と、化石燃料費削減を行う。また、里山体験プログラムの一環として間伐体験や薪割り体験を行い、体験終了後に参加者は、薪で暖めたお湯で疲れを癒すことが出来る。



(ほっとはうすさめがわ)

2) 「手・まめ・館」における薪ボイラー導入

鮫川村産食品の販売・加工を行っている「手・まめ・館」には、新鮮な素材を提供する食堂や、豆腐の製造施設も併設されており、給湯をガス・灯油で行っている。給湯熱源を薪ボイラーに転換することで、食育と同時に環境教育を実施する。また、温水を利用した足湯を設置し「手・まめ・館」の魅力を増進する。背後には館山公園があり、豊富な森林資源が調達可能である。

村内で栽培した「しいたけの廃ほだ木」は、薪ボイラーの燃料として利用する。

3) 村内における薪供給市場の開拓

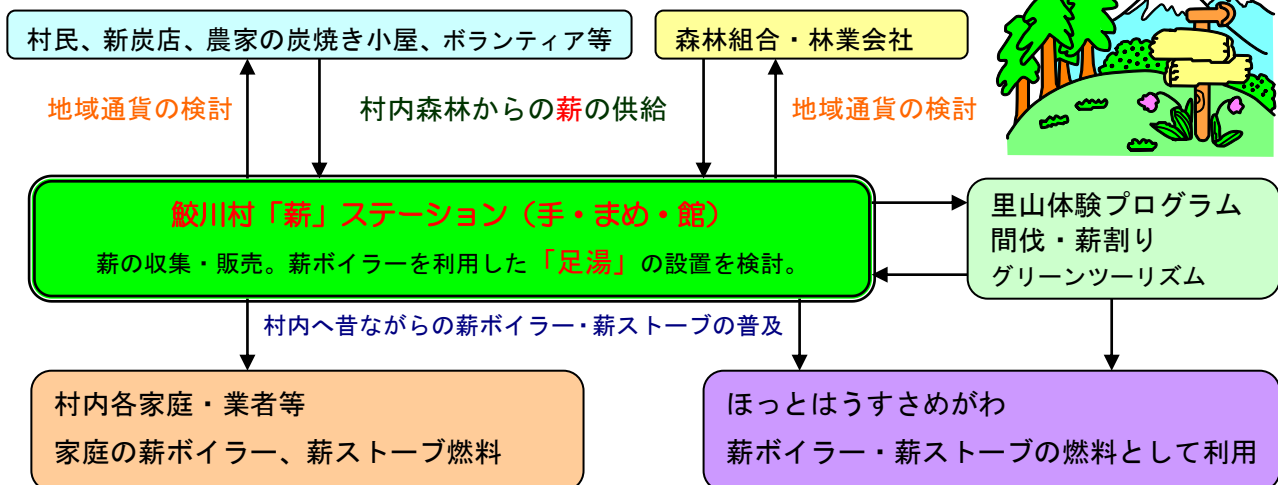
森林組合や農家、村内新炭店などと連携を行い、村内へ薪を安定的に供給する仕組み作りを行う。主伐・間伐時にアクセスの良い林道脇へ薪用材木を貯留し、例えば「手・まめ・館」などに設置した薪ステーションへ材を流通する仕組みを検討する。搬出費用は、薪の販売や森林税などを有効に活用する。

薪の収集に協力した村民には、重量に応じて、入浴券や野菜、ランチなどと交換が行える地域通貨（通貨単位 例：100 まめ）の発行などを検討する。また、薪を持参した村民にも重量に応じ、地域通貨の交付などについて検討する。

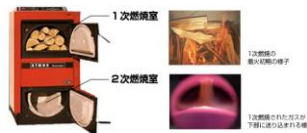


(館山公園)

【木質バイオマス利活用フロー図】



**森林エネルギーの有効活用で化石燃料を減らし、地球温暖化防止に寄与
森林の保全と村民の新たな産業の創出に寄与**

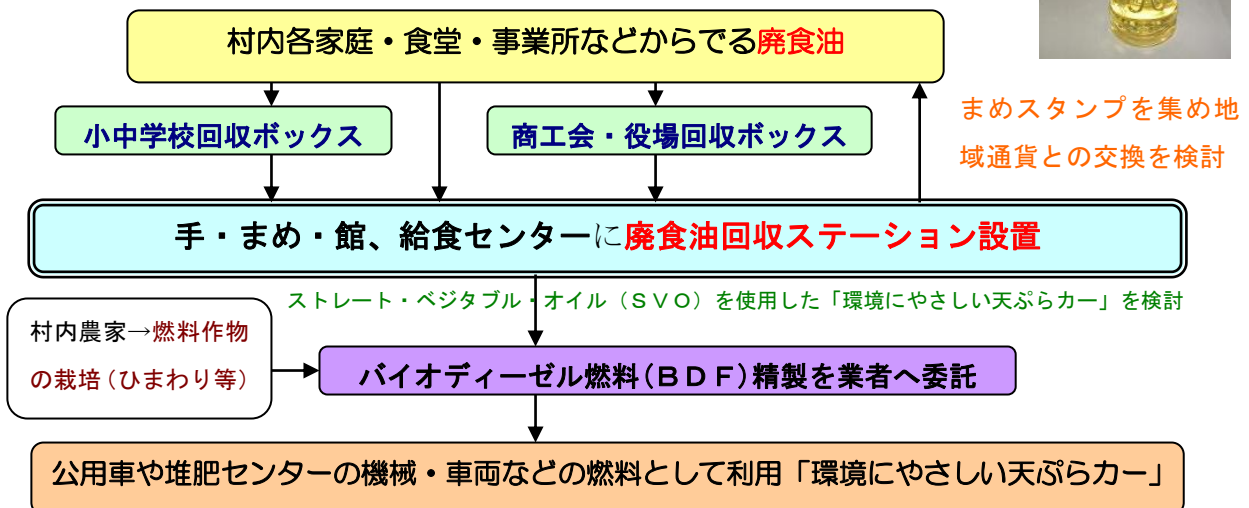


③ 廃食油の有効利用と燃料作物栽培の推進

- ・給食センターや家庭で発生する廃食用油を回収し業者へ委託して、バイオディーゼル燃料（BDF）を精製する。それを給食車や福祉バスなどの公用車に利用する。
- ・家庭からの廃油を回収できるよう小中学校や商工会・役場に回収ボックスを設置し、手まめ館・給食センターに回収ステーションを設置して村内の廃食油を回収する。
- ・小中学校の回収ボックスで集まった廃食油を学校給食車で回収ステーションへ収集運搬。回収ステーションでまとめて業者に引き渡す。
- ・廃食油を持参した村民には、まめスタンプを押印し、地域通貨との交換を検討する。
- ・遊休農地を活用して菜の花やひまわりなどの燃料作物栽培を視野に入れた利活用を検討する。
- ・賞味期限の切れた食用油や廃食油をストレート・ベジタブル・オイル（SVO）として、公用車の燃料として利用する。「環境にやさしい天ぷらカー」を作る。



【新エネルギーのフロー図】



村で排出した廃食油を有効活用することで、子ども達の環境教育と地球温暖化防止に寄与することができる。(廃食油が新エネ)

④ 資源作物によるアルコール開発（バイオ燃料や焼酎）

鮫川村においては現在、東京農業大学による、様々な実地検証がおこなわれている。その中で、休耕地を利用した資源作物の研究では、キクイモの栽培が効果的であることがわかった。実証では、キクイモは鳥獣害もなく、栽培コストをかけずに、糖分豊富な球根を効果的に栽培できた（4.9 t/ha）。

将来、農業振興公社や民間会社に委託して、これらキクイモなど燃料作物の糖分を原料とした「バイオエタノール」や「地元焼酎」の開発が期待される。

エタノールは、消毒用エタノールとして利用できるため、給食センターや手まめ館の手洗い用や調理器具の殺菌、畜舎の消毒、医療用など調理・農業・医療の多面的活用が見込まれる。また、消毒用エタノールの販売も視野に入れて検討する。

アルコール発酵残渣は飼料として利活用するなど畜産分野に活用できる。

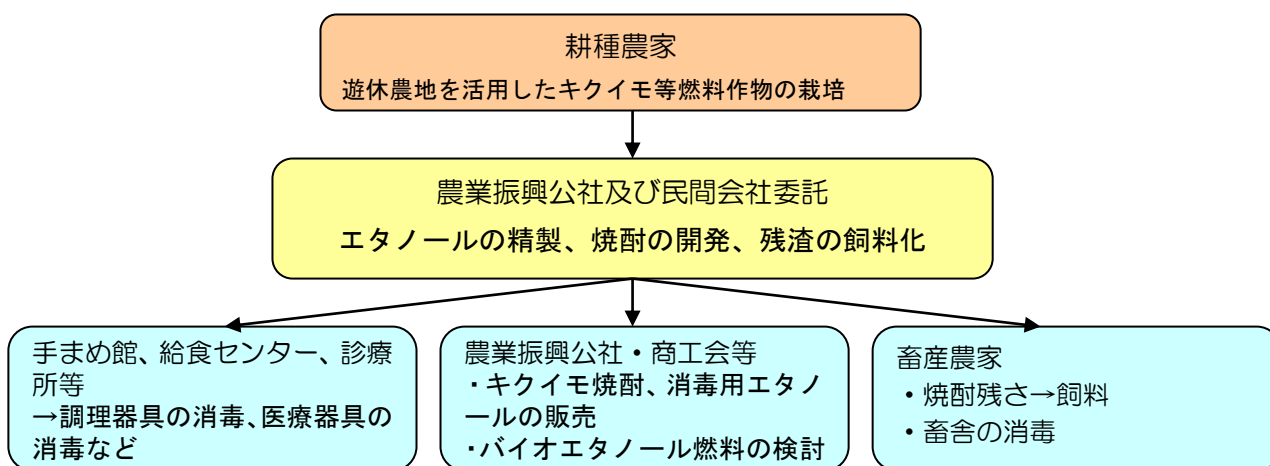


(村内の東京農大キクイモ圃場)



(キクイモの花)

【キクイモ利活用フロー図】

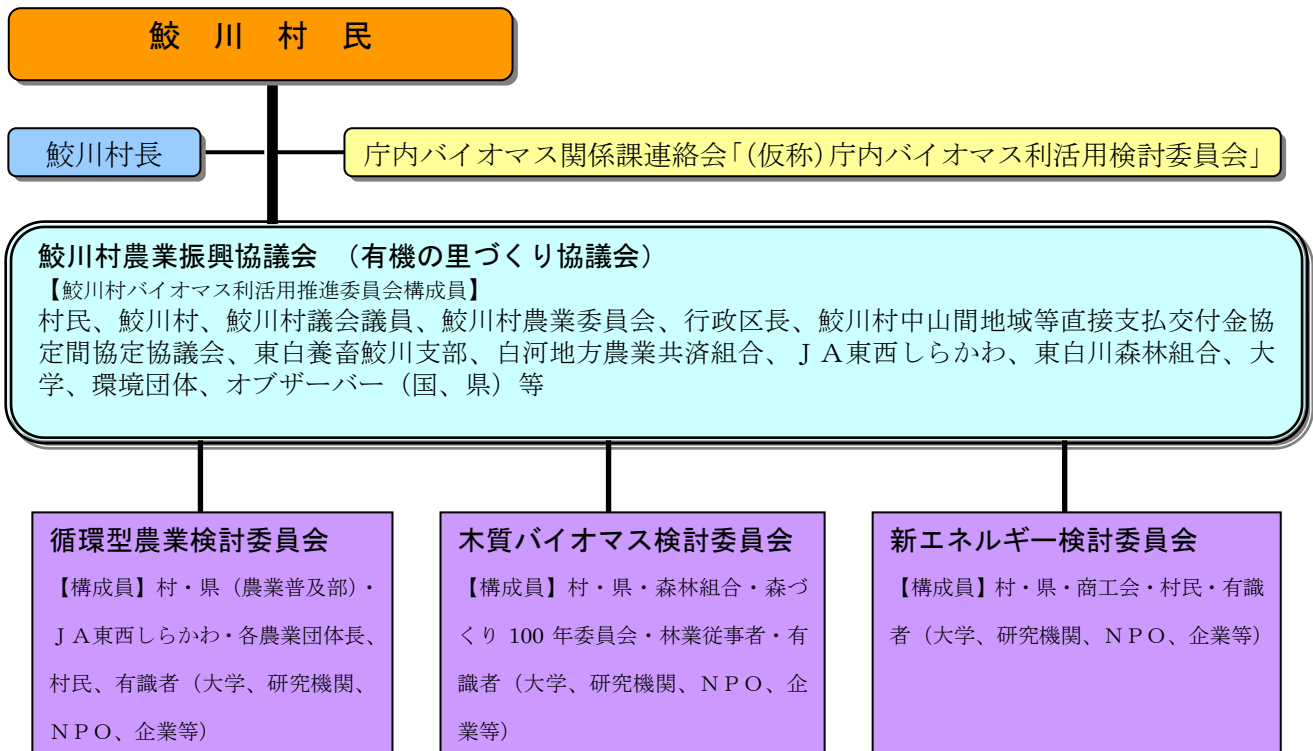


キクイモによる、遊休農地の解消と新たな産業の創出、そして村おこしに寄与

(2) バイオマスの利活用推進体制

村民、行政、地域の組織や NPO、大学や専門家などの連携を図り、シンポジウムや視察研修を開催するなどして、産・学・官・村民から構成する「鮫川村農業振興協議会」を組織して、本構想の推進を図るため、必要に応じて部会を設け、適切なバイオマスの利活用を検討していく。

【イメージ組織図】



- ・新たな楽しい製品の開発を進め、村民とともに、新たな村の発信や村づくりを推進し観光客や見学者の増大を図り、生きがいや新産業の創出を図る。
- ・どぶろく特区の申請や農産物のネーミングを検討する。
- ・地域通貨や各種体験を組み合わせ、エコツーリズムとの連携を図る。



(3) 取組工程

	短期的な取組み (H19～H21)	中期的な取組み (H22～H23)	長期的な取組み (H24～)
バイオマス利活用 推進体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・鮫川村農業振興協議会の設置 ・基本構想策定、環境フォーラム等開催 ・バイオマス資源の利活用の検討 ・村民への啓発、意見聴取 ・広域連携、情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・鮫川村農業振興協議会検討会、運営状況調査、評価委員会設置、バイオマスタウン構想実現に向け検討 ・村民への啓発、意見聴取 ・広域連携、情報発信、宣伝 	
①家畜排せつ物、農業廃棄物(稲わら等)、落葉、刈草、竹、豆腐残さ等の利活用	<ul style="list-style-type: none"> ・収集システムの確立 ・良質堆肥化の研究・開発 ・土づくりセンター(堆肥化施設)の整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・土づくりセンター(堆肥化施設)の稼働 ・竹・豆腐残さ等を用いた飼料の検討、試験 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料化施設整備稼働
②林地残材、間伐材、きのこ栽培ほだ木等の利活用	<ul style="list-style-type: none"> ・薪ボイラーを用いた熱利用の検討 ・収集システムの検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・薪ボイラー施設整備稼働 ・収集システムの実践 	
③給食センター廃食油、家庭廃食油、菜の花等の利活用	<ul style="list-style-type: none"> ・BDF 利活用の調査・検討 ・収集システムの検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・BDF の利用開始 	
④飼料作物、花卉、燃料作物の生産	<ul style="list-style-type: none"> ・燃料作物(キクイモ)栽培等について検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・燃料作物(キクイモ)栽培等について試験 	<ul style="list-style-type: none"> ・燃料作物(キクイモ)栽培等について施設整備、稼働
	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料作物栽培の推進(遊休農地の活用、自給飼料の増産) 		

(4) その他

- ・鮫川村の地形を活かした小水力発電やスターリングエンジン※の利用を検討。(新エネの開発)

7. バイオマスタウン構想の実施により期待される利活用目標及び効果

(単位：t)

バイオマス	賦存量	炭素換算	変換・処理方法	仕向量	炭素換算	利用・販売	目標値
(廃棄物系バイオマス)							
家畜排泄物	70,626	12,007	堆肥化	70,626	12,007	農地、販売	100%
・肉牛	12,259	2,084	堆肥化	12,259	2,084	農地、販売	100%
・乳牛	5,610	954	堆肥化	5,610	954	農地、販売	100%
・農家飼養豚	5,081	864	堆肥化	5,081	864	農地、販売	100%
・企業飼養豚	47,676	8,105	堆肥化	47,676	8,105	農地、販売	100%
生ごみ	45	5	焼却、コンポスト	40	4	農地	80%
集落排水汚泥	102	26	焼却	0	0	なし	0%
農業廃棄物(非可食部)	4,590	918	鋤込み、焼却	0	0	農地、	0%
廃食油(給食センター、家庭)	3		BDF化(村外)	3		購入(村内)	100%
食品工場残さ (給食センター・手・まめ・餅)	5	1	飼料化	5	1	養鶏場使用、販売	100%
しいたけ栽培廃ほだぎ	10	4	燃焼	0	0	燃料	0%
しいたけ栽培菌床	58	52	堆肥化	58	52	販売	100%
合計	75,439	13,013		70,732	12,064		92.7%
(未利用バイオマス)							
切捨間伐材	5,880	2,528	燃焼	2,940	1,264	燃料、販売	50%
稲わら、もみ殻	2,510	1,757	再利用	2,008	1,405	敷料、販売等	80%
竹	90	38.7	飼料化	45	19	販売	50%
合計	8,480	4,324		4,993	2,688		62.2%

(1) 利活用目標

廃棄物系バイオマス：90%以上の利活用、未利用バイオマス：40%以上の利活用

(2) 期待される効果

地元土着菌を使った良質堆肥の生産(豊かな土づくりセンターの整備)により、村の豊かな自然環境と源流の里であるきれいな水・豊富な畜産資源を十分に活かし、有機にこだわり、堆肥にこだわり、土にこだわってできた安全な農産物を食すことで、全村民が健康とやすらぎを維持することが期待される。

相乗効果としては、

- ・良質堆肥で作ったこだわりの農産物を鮫川ブランドとして流通することで、農業をはじめ商工業の発展、循環型社会の構築に寄与することが期待できる。(農業の6次産業化)
- ・先人から受け継がれた貴重な農地を守り村の美しい景観を維持することができる。
- ・子どもたちが、命の源である食料、それを生産する農業や農家、そして数多くの命への感謝の気持ちを育むとともに、食と農そして心の教育に資することができる。



地元学校給食米栽培農家との農業学習の様子

バイオマスヴィレッジ（バイオマスタウン）構想の実現にむけ「人と自然にやさしい農業」を実践し、健康・やすらぎ・有機の里の構築を目指すことで、村民一人ひとりの命を守り村民が生きがいをもって安心して生活することが期待できる。（健康で笑って暮らせる村）



①自然環境の保全

- ・地元土着菌を使った良質堆肥を農地に還元することで、土壌の保全・回復・改善に寄与する。「生命が宿る生きた土」を作ることができる。地下水の汚染を防ぐ。（農業公害防止）
- ・間伐材や落ち葉などの森林資源活用を推進することにより、森林の適正な育成や鳥獣による農作物の被害の低減が図られ、安全で緑豊かな森林・里山の保全が図られる。（鳥獣害対策）
- ・遊休農地に飼料作物を作付けすることで農地を守ることができる。（遊休農地の解消）
- ・未利用地等への放牧を推進することで、農地及び里山景観の保全と和みの空間を創設する。
- ・薪ボイラーによる温浴施設への熱供給と、灯油に代わる代替エネルギーとして活用し、間伐の



利用促進と温室効果ガスの削減に寄与する。

- ・村内から廃食油を集めバイオディーゼル燃料として学校給食車や福祉バスに利用することで、温室効果ガスの削減を図り、村全体で地球温暖化防止対策に積極的に取り組む。（地球温暖化防止）

- ・ゴミの削減・省エネ、リサイクルを実施し、村民一人一人の環境に対する意識の高揚を図る。（ゴミがないきれいな村）

②経済効果

- ・良質堆肥の施用による土づくりを行うことで、農産物の品質・収量の向上と経費削減が図られ、農家所得の向上に寄与する。（農業の振興）
- ・新たな産業の創出と住民の雇用促進に寄与することができる。
- ・稲発酵粗飼料の製造による飼料自給率の向上と農地の保全で畜産農家の経営安定を図る。
- ・作業受託組織（コントラクター組織）の整備による農家の高齢化対策及び省力化、所得安定対策、若者の雇用対策に寄与する。
- ・お年寄りの生きがい対策。5月～11月は、「まめづくり」。12月～4月は「落ち葉さらい」で高齢者の所得向上と健康増進を図る。＝まめで達者な村づくり
- ・薪ボイラー、薪ストーブなどの木質バイオマスを利用した暖房機の普及により、村内に薪の新たな市場を開拓し新たな雇用対策と住民の所得向上に寄与する。
- ・間伐や薪割り、農業体験などにより、村民参画による景観・環境整備を行い、村の自然・歴史・文化を生かしたグリーン・ツーリズムなどを推進して、交流人口の拡大と経済の活性化に寄与する。
- ・農業の6次産業化を図ることができる。→地域が活性化するとともに、農業そして商工業がにぎわい「健康とやすらぎ・有機の里」を構築することができる。（村全体の活性化）



③食育・健康・ゆとり

・食育の推進→地元でとれた安全な食材を学校給食に供給することで、こども達が命の源である食料、それを生産する農業や農家、そして数多くの命への感謝の気持ちを育むとともに、食と農そして心の教育に資することができる。

・村民の健康増進→良質堆肥で土づくりをした農地から安全な農産物を生産し村民が食すことで、村民の健康と命を守る。そして、医療費の削減に寄与する。

・村の豊かな人々と自然環境で育つことで「心身ともに健康で、主体性を持って意欲的にやろうとする態度を養い、豊かな自然と地域社会にふれながら、心豊かで創造性あるこどもに育てることができる。」（さめがわこどもセンター保育目標より抜粋）

・廃食油を小中学校で集めることにより、将来を担うこども達の環境教育に寄与する。

・地元資源を利用した堆肥、地元農産物の販売や廃食油の利用を図ることで、村民の目に見える形で資源を地産地消することによる循環型社会構築への理解の促進を図ることができる。

・村で生産した良質堆肥を使って、農作物を村独自の認証制度に従い栽培し、消費者に対して安全性をアピールする（HP等）ことで、消費者に信頼、愛される「鮫川ブランド」の確立が期待される。

・村の自然を守り、自然に触れ、自然を満喫することで、心が癒されるとともに家族で余暇を楽しむことができる。（心のゆとりと家族の絆づくり）



8. 対象地域における関係者を含めたこれまでの検討状況

- ・平成18年12月、村循環型農業推進良質堆肥生産体制整備検討会開催
- ・平成19年11月、鮫川村農業振興協議会（有機の里づくり協議会）設置、第1回会議
村の農業振興策やバイオスタウン構想の取組みについて検討。
- ・平成19年11月、鮫川村農業振興協議会先進地視察研修
- ・平成19年12月、庁内バイオマス関係課連絡会議
- ・平成20年2月、鮫川村資源活用バイオマス研修会
- ・平成20年7月、第2回鮫川村農業振興協議会開催
- ・平成20年8月、鮫川村バイオマスヴィレッジ（バイオスタウン構想）構想研修会
- ・鮫川村議会全員協議会で鮫川村バイオマスヴィレッジ（バイオスタウン構想）構想について検討



（高原の鮫川うまいもの祭り）



（鮫川の郷土料理を楽しむ会）



（ふるさと相撲大会）

9. 地域のバイオマス賦存量及び現在の利用状況

(単位：t)

バイオマス	賦存量 (炭素換算)	変換・処理方法	仕向量 (炭素換算)	利用・販売	利用率
(廃棄物系バイオマス)					
家畜排泄物	70,626 (12,007)	たい肥化	46,788 (7,954)	農地、販売	66%
・肉牛	12,259 (2,084)	たい肥化	12,259 (2,084)	農地、販売	100%
・乳牛	5,610 (954)	たい肥化	5,610 (954)	農地、販売	100%
・農家飼養豚	5,081 (864)	たい肥化	5,081 (864)	農地、販売	100%
・企業飼養豚	47,676 (8,105)	たい肥化	23,838 (4,052)	農地、販売	50%
生ごみ	45 (5)	焼却	0	なし	0%
集落排水	102 (26)	焼却	0	なし	0%
農業廃棄物(非可食部)	4,590 (918)	鋤込み、焼却	0	農地	0%
廃食用油(給食センター、家庭)	3	BDF化(村外)	0	販売(村外)	0%
食品工場残さ(給食センター・手まめ館)	5 (1)	飼料化	5 (1)	養鶏場使用、販売	100%
しいたけ栽培廃ほだぎ	10 (4)	燃焼、放置	0	燃料	0%
しいたけ栽培菌床	58 (52)	再利用	58 (52)	販売	100%
合 計	75,439 (13,013)		46,851 (8,007)		61.5%
(未利用バイオマス)					
切捨間伐材	5,880 (2,528)	燃焼	2,058 (884)	燃料、販売	35%
稲わら、もみ殻	2,510 (1,757)	再利用	250 (175)	敷料、販売	10%
竹	90 (38.7)	放置	0	なし	0%
合 計	8,480 (4,324)		2,308 (1,059)		24.4%

10. 地域のこれまでのバイオマス利活用の取組状況

(1) 経緯

①平成8年～平成11年、鮫川村家畜糞尿処理対策協議会設置 家畜排せつ物法施行に向けて、一箇所集中型の堆肥センターと個別農家の堆肥舎設置について検討。平成11年度から畜産農家個別に堆肥舎を設置することとなる。

②平成18年4月～、鮫川村バイオマス賦存量(炭素)調査開始 東京農業大学の協力を得る。→窒素やリンについては、平成15年より2年間かけて調査済。

③平成18年12月、村循環型農業推進良質堆肥生産体制整備検討会開催

有機の里づくり：土づくりの重要性と畜産堆肥の有効利活用、堆肥センターの必要性について検討。住民アンケートの実施を決める（堆肥の需用と供給）。

・ペレットストーブ10台設置（小学校・中学校・公共施設等）。森林環境税利用。

④平成19年3月、農業に関する住民アンケート実施（全世帯配布）。回答率51%。約7割の住民が「村で作った良質堆肥を使いたい」との回答。畜産農家からは、約2,093tが堆肥センターへ供給可能という回答。

・東京農業大学「バイオマス研究成果発表会」 村公民館（村職員、村民対象）

⑤平成19年4月、福島県県南振興局、県南農林事務所へバイオマスタウン構想と堆肥センター設置に向けての相談。法令関係や補助事業を確認。

・良質堆肥の実験を本格的にスタート。

⑥平成19年10月、（社）日本有機資源協会 バイオマス利活用コーディネーター養成研修参加。（東京都）

⑦平成19年11月、鮫川村農業振興協議会設置。バイオマスタウン構想について検討

・鮫川村農業振興協議会先進地視察研修実施。須賀川市「ひまわり」、大玉村

・バイオマス利活用コーディネーター養成研修現地研修会実施

⑧平成19年12月、庁内バイオマス関係課連絡会議

⑨平成20年2月、鮫川村資源活用バイオマス研修会

⑩平成20年7月、全国バイオマスサミット参加

・鮫川村農業振興協議会開催

⑪平成20年8月、鮫川村議会全員協議会で鮫川村バイオマスヴィレッジ（バイオマスタウン）構想について説明

・「地域資源をいかしたゆうきの里づくり研修会」バイオマスヴィレッジ（バイオマスタウン）構想公表研修会

（2）推進体制

・平成19年11月に設置した鮫川村農業振興協議会（有機の里づくり協議会）において、環境の保全や循環型農業推進、有機の里の構築に向けて取り組む。住民と行政が一体となりバイオマスヴィレッジ（バイオマスタウン）構想の実現を目指す。



（村の花：やまゆり）

（3）関連事業・計画

・平成20年度に生ゴミの処理方法として、各家庭に発酵促進剤（完熟堆肥）を無料配布し、生ゴミの早期分解（腐植化）を図るとともに生ゴミ量の削減に寄与する事業計画を策定。